

女性の聖性——『源氏物語』の視座から

田中 洋子

当該第二八号の拙稿「東アジア中世女性神話に関する一考察」以来、東アジアに普遍的に見られる女性の神性・聖性について興味を持ってきたが、また論考にまとまるような成果は挙がっていない。今回は研究ノートという形で責を塞ぐことをお許し願いたい。

フランスのフェミニズムを牽引してきたジュリア・クリステヴァ女史と民俗学・宗教学の分野で多大の貢献をなしたカトリヌ・クレマン女史が女性の聖性について交換した書簡集を一読した。(注1)

アジア・アフリカに及ぶ浩瀚な知識と明晰な理論に裏打ちされた、二人のフランスを代表する女性学者の論は、時には批判し合い、かみ合わない点もありながらも、女性の聖性という問題について、啓発的な意見を提出している。書簡集という性質上、精緻な考証というよりは、自らの体験にもとづく所感を織り混ぜながら、むしろ論文より自由に女性と聖性について語っている感が強い。

その女性の「聖性」を見て行くと、『源氏物語』の女性たちのことが思われた。これは意外な驚きだった。ヨーロッパ現代の理性が語る女性の聖性に、平安時代物語の女性が姿をあらわすのであるから。

『源氏物語』は愛と王權と教済の物語たというのが私見であるが、彼女たちはその「教済」に聖性という部分で深く関わっているのである。以下、クリステヴァとクレマンの論を見つつ『源氏物語』のヒロイン、紫上を見てみよう。お断りしておくが、このノートは全体にわたる批評的見地からの論ではない。現代の聖性論の拾い読みを『源氏物語』の視座から逆照射していく、といったものである。

一通目の手紙(注2)でクリステヴァは、女性の聖性は「生を与えること」、男性の聖性は「意味を与えること」である、と定義している。「生を与えること」は即ち母性である。母性・生殖の聖性については新しく論じるまでもない。これに対して「意味を与える」男性の聖性については、社会民俗学などの立場からV・ターナーなどの論(注3)にも明らかである。世界神話の男性主神を見てもクリステヴァの論が納得できよう。

光源氏の最愛の女性、紫上は才色兼備で光源氏の寵愛を一身に受ける物語中最大のヒロインといっているが、彼女に唯一欠けていたものは子供だった。よき母たる資質と可能性を自他ともに認めていた紫上にとって痛恨事だった。

早く死んだ葵上の他に光源氏の子を産み「生を与えるもの」としての役割を果たしたのは明石女君である。水辺の女として、彼女の担う神話的役割も大きい。その明石女君のもう一つの聖性は明らかに「母たること」であった。厳しい階級秩序の支配する現世において、しかし、彼女はその出身の故に我が子を手放さねばならなかった。

その姫君の養育を引き受け、世間的に認められたその地位をバックに、姫君を后がねにふさわしい娘に育て上げたのは紫上だった。いわば姫君に「意味を与える」役割を果たしたのだといえる。

「生を与えた」明石女君に対して、紫上は世間的枠組の中での意味づけをしたという点で、ある意味で男性的役割を果たしたといっている。もちろん、その後の紫上のおふれんばかりの母性愛は、光源氏が常々姫君にもさすように、実母以上に母的なものであった。クリステヴァの分類を借りれば、紫上は姫君の養育に関しては女性的な聖性と男性的な聖性の体现者だった。紫上の際立った聖性は、やがて女性の「教済」の物語となつて、より崇高な境地へと高められていく。

この他にもクリステヴァとカトリシーヌの往復書簡中には聖と汚の関係性や、母・息子、狂気・理性、女・男の二項対立など興味のある論が見られる。このノートではその中の一例を挙げるに止めるが、『源氏物語』の女性がその論に照らされ新しい像を浮かび上がらせて、再び女性の聖性の問題を読む者に逆照射してくるのは何故だろうか。これから考

えていきたい問題ではあるが、女性の聖性の普遍性についても、『源氏物語』における女性の聖性の本質が、永遠かつ普遍的なものであることを示しているのは確かであろう。

注1 Catherine Clement, Julia Kristeva

Le féminin et le Sacré (Editions Stock) 1998

訳 The feminine and the sacred (tr. by Jane M. Todd)

Columbia University Press 2001

注2 英訳本 P14

注3 V・ターナー

『儀礼の過程』 富倉光雄訳 思索社 (昭51)

『象徴と社会』 梅原昌昭訳 和泉國書館 (1981)